

た。それから彼女の枕邊には毎朝天使が置いて行つたかのやうに小さな花が一輪づゝ咲くやうになつた。白や赤のも咲いた。

姉は朝と夕方とに自分が信仰してゐる神に祈りをささげた。細いふるへを帯びた祈りの聲のする時私は部屋をぬけ出して廊下で顔を覆うて泣くことがあつた。細り行く生命を暗示するやうな姉の聲に私の胸は腐蝕されて行くかのやうに痛むのであつた。けれども私は膝まづいて祈ることが出来なかつた。神を知らない私のかたくなる心を私にはこの場合どうすることも出来なかつた。

夜は姉も村尾さんも早くから床についた。青い紙で包んだ電燈の淡い光が静かな二人の眠りを見守つた。森として更けて行く十一時頃に夜勤の看護婦が忍びやかに入つて来て蚊張の外から病人の様子を見てやがて忍びやかに出て行くのであつた。深い夜の沈黙から静かに現はれて静かに消えてゆくこの白衣の人を私は三疊間から蚊張越に眺めることがしばしばあつた。

全快して退院して行く人や新たに入院する人などがあつて私は二十日余り居る間にこの病舎の人は大方新らしくなつた。上原さんも退院して行つた。彼女は玄關まで見送つた姉の手を取つて涙を湛へて姉の病の全快を祈つた。彼女の家からは誰も迎ひに来る者がなかつた。同情者のない冷たい家庭に歸つて行く彼女の車を見送つて姉も私も全快しきらぬ彼女の病を氣遣つたのであつた。

姉と村尾さんとは幾人かの知人を送つてなほ後に残つた。八月の中旬になつた頃病院の庭にも百日紅の花が咲きそめた。姉は常のやうに氣分のいい時には椽に出てこの花を眺める事を好んだけれども其頃から話することを物憂いやうにして獨り物思ひに沈むやうな時が多くなつた。そして時々思ひ出したやうに指を折つて入院してからの日數を數へたりした。姉が入院してから三ヶ月の日數が間もなくつきようとする頃であつた。

濃い緑の葉蔭に赤い花は日毎に増して行つたけれども姉の病は良くも悪くもならなかつた。(完)

◎笠井さまに

み な み

私其の手から貴女を奪はれてからもうかれこれ半年にもなりませう。初めての都會生活はあなたに活動の喜びを齎しました。あのすがすがしい眼は美しいものへ眞實の方へと向けられたのでした。そしてあなたの明日はより明るいより遙かなところにあつたのでした。

「實は私あの三月十九日の朝青山先生に恐ろしい宣告を受けた時も左程に驚きませんでした。若い私等がこれ位のこと直に治る。治る。治ると思ひましたから。」

かうして其の生れた國へ歸られたあなたの御手紙にはいつか「治るでせうか」といふ文字が見える様になりました。醫者のいふことには盲従しなくてはならぬのでせう」ともありました。

「もうなるがまゝにまかせます」とも書かれたのでした。

「前途は闇に閉された。親しい人が一人一人自分を離れてゆく。遣る瀬ない寂しさが迫る。「唯神のみを頼め」といふことばを思ひ出す。強い同情を求むる心が悲しい。今の自分から脱却したい。」

私はかうしたあなたの病院生活に於てその心と肉体とに加へられた強い鞭撻を思はずには居られません。私は今でも白いベッドの上に静かに横つたかばそい貴女のからだを見ることが出来る様にその安らかな寢息の中に絶間なくひびいた強い生の息つかひを聞くことが出来ます。

蛙の聲がする頃届いた手紙きりでその後の御様子も少しも知らない上に元來が貧弱な頭と徹底せぬ活き様を續けて居る私には貴女の深い強い高潮の生活を思ひみることも許されません。終りの數十日を「如何に生活されたか」の答は表面的なことばの繰り返しか死と面接すると同時に生に面接された貴女の生活の憶測に後もごり

する外ありません。

あなたは未明氏のものによるこばれました。「北國の鴉より」の中には多くの自分自身を見出された様でした。余白のところには細かく書き入れがしてありました。あのおちついた色調なり快い手ざはりなり單にあつた装幀にでも貴女の純な心は私共於以上の共鳴を感ぜられたのでせう。

夕食の後などに二人でよんだ「悲しき玩具」も私にとつては子供を失つた若い母親が手のとれた人形を見付けた時の様な心をもたせるものになりました。

そんならば命がほしくないのかと
醫者にいはれて
だまりし心

病院のまごによりつゝ、
いろいろの人の
元氣に歩くを眺む。

ぼんやりとした悲しみが
夜となれば

寢台の上にそつと來てのる。

思ふこと盗みきかるゝ如くにて
つと胸を引きぬ――
聴診器より。

春の雪みだれて降るを

熱のある日に
かなしくも眺め入りたる。

寢つつよむ本の重さに
つかれたる
手を休めては、物を思へり。

はづれまで一度ゆきたしと
思ひぬし
かの病院の長廊下かな。

今日もまた胸に痛みあり

死ぬならば、

ふるさとにゆきて死なむと思ふ。

いつとなく我に歩みより

手を握り、

またいとなく去りゆく人々――

病癒えず。

死なず、

日毎に心のみ險しくなれる七八月かな

きりがありませんからもう止めませう。これを拾つてみても貴女その頃の生活を思ひ出させぬものはないのです。

「自分が今思ふまゝに改め得べきものは机上硯箱やインキ壺の位置と歌位のものだ。惨ましい二重の生活―私の生活は矢張り現在の家族制度階級制度資本制度知識賣買制度の犠牲である。」

かうした作者とあなたの生活を一緒にする譯ではありませんが肉体を襲うた病、そこにはじまつた肉体に對する激しい鞭撻、は全く同じものではなかつたでせうか。

彼は故里で死にたいと思つて死ねなかつたのでした。死ぬる日まで小さな本の重みにも疲れ易い手で我と生きてゆかねばならぬ人でした。貴女は故里で死なれました。父母の慈愛に抱かれて――

ノスタルヂヤアになやまされた二人はよくこんな小唄を口にしました。

小鳥でさへも巢は戀し。まして故里青空や
生れし國のバライソー。

あなたはその生れし國のバライソーに安らかにいこはれたのです。そしてあなたにとつて死といふことは悲しいものには違ひなかつたのでせうが其はあきらめでもなく暴虐でもなく恐怖でもなく醜惡でもなく虚無でもなかつたのでせ

う。
死そのものによつてはじまる何物かがあつた
様に思はれます。私がかうしてあなたのことを
思ひ出して居る時にあなたは記憶の國にめぐめ
て居らるゝのではないでせうか。あなたのお目

には高原の土の中にめぐむ青い小さい命がか
やいて居るのではないでせうか。
命の中に迷ひ啼く小鳥の歌に耳をかたむけて
居らるゝのではないでせうか。

八千代のふみ

きのふもまさら、けふもまさら、
只今にし一つ見えたり
さにもあらず。かしこ

偶感

◎日誌の中より

今朝私の一番うれしい便りがあつた。その中
にこんな歌があつた。小さき詩人の作が。
父上と共に寒さを感じつゝふるへて歸る縁日
の夜
中食に辨當のフタを開き見ばブンと肴の匂ひ
がするよ
自轉車に乗つて轉げてけがをして母に叱られ
こりもせず乗る
日曜日友と遊びに行きし野にハンカチーフを
忘れて歸る
なつかしき家に歸りて只今と一聲いへばペ
も一聲
飛行器のうなりに似たり愛宕山峯の梢に吹く
風の音

庭園の隅に小さき白菊が私の様に咲いて居る
かな
學校より歸りて見れば縁先に一羽の小鳥米つ
ぶ拾ふ
母上のお乳をば見てひとくちをすいたけれど
も今ははづかし
淨瑠璃を習ひつゝある我友が椋から落ちて今
は入院
小さい詩人等は今日も美しい世界で鬼ごつこ
や相撲や兵隊遊びやに夢中になつて居る事だらう
そして、又、私どもの先祖が、したやうに、見
た儘を、思つたまゝを、ひねくりもせず、振り
もせず。極自然な、而も高い調子で歌つて居る事
だらう。